校長室だより

沖高 みへでぃろ vol.33

令和４年12月１日発行

県立沖永良部高等学校

生徒の皆さんへ

朝夕が肌寒い季節となってきました。早いもので令和４年も年の瀬が近づいてきました。今年は皆さんにとってどんな一年だったでしょうか。令和５年に向かって，新たな目標を立てられるように，たまには振り返りをしてみましょう。

狭くて暗く静かな『世界』

高校卒業後に姿を消した恋人に偶然再会すると，耳が不自由になっていた……。別れを乗り越え，今を生きようとする女性(川口春奈)と，障がいを患い自分と向き合えず別れを選んでしまった青年(SnowMan目黒蓮)が再び出合い，二人を取り巻く人々が織り成す切なくも温かい，KTSテレビドラマ「silent ｻｲﾚﾝﾄ」を欠かさず見ている生徒もいるのではないでしょうか。戸惑いながらハンディを乗り越え，心を通わせるさまが胸を打つ。一方，表情やしぐさ，声色といった言葉以外の要素が意思疎通に大きな役割を果たしていることにあらためて気付かされる。

耳だけでも不自由なのに，目と耳の両方が不自由だったら，対話のハードルは格段に上がる。さらに，光と音の無い世界をさまよう絶望や孤独感はどれほどだろうか。想像もできない状態である。しかし，現実にこの世界に身を投じることを余儀なくされた人物がいる。それが，視覚障害かつ聴覚障害者でありながら，世界初の常勤の大学教授となられた東京大学の福島智教授，その人である。

福島さんは９歳で視力，18歳で聴力を失った。当時のことを福島さんは「私はいきなり自分が地球上から引きはがされ，この空間に投げ込まれたように感じた。自分一人が空間の全てを覆い尽くしてしまうような狭くて暗く静かな『世界』。私は限定のない暗黒の中で呻吟していた」と綴っている。また，「宇宙船がどこかの星に不時着し，地球と交信できない状態」とも例えている。そんな絶望の淵から立ち上がれたのは母親が考案した「指点字」であった。これは，相手の指を点字タイプライターのキーに見立て，タッチして言葉を伝える方法である。福島さんは新たな対話の手段を得て社会とつながり，盲ろう者として日本で初めて大学に進学した。その後，研鑽を重ねて金沢大学准教授を経て現職となる。

福島さんはコミュニケーションは他者との触れ合いを拡げ，空気や水と同じように人が生きていく上で欠かせないのだと身をもって諭している。そこにとどまらず，置かれた境遇に自分の使命を見いだし，バリアフリーの研究に情熱を傾ける姿には胸を打たれ，頭が下がる想いである。

この度，福島さん母子を描いた映画「桜色の風が吹く」が公開されたそうだ。検索すれば，YouTubeでご本人の語りも見られる。著書である『ぼくの命は言葉とともにある』も早々に図書館の蔵書にも加える。皆さんには世の中には過酷な壁を乗り越えた人がいることも知って欲しい。

参考文献：南日本新聞R4.11.15.南風録

勉強は何のため？

出典　『なぜ僕らは働くのか』　監修：池上彰

なんで，勉強しなくちゃいけないんだろう？そう思ったことはありませんか？勉強は大きく分けると「自主的にする勉強」と「学校の勉強」の２つがあります。

「自主的にする勉強」は自分の興味のあることや自分が必要だと思ったことを学びます。大人がする勉強の多くはこれにあたるでしょう。この勉強は，自分に合った勉強をしていることもあり，大事だと感じる人は多いでしょう。

「学校の勉強」ももちろん大事です。この勉強は，まず社会に出るための基礎体力になります。学校で習う内容は，かなりの部分が社会を生きるための力と関わっています。学校で教わった知識や考え方が基盤となって，仕事に活かされることはよくあります。次に，学校の勉強は将来の選択肢を広げるのに役立ちます。勉強を通して得られた知識技術や資格等をもって，就職活動の幅も広がるのです。

また，学校の勉強を頑張ることで自信が得られる場合もあります。勉強にしっかりと取り組むことができたら，それは立派な成功体験といえるでしょう。ただし，勉強さえしていればいいというわけではありません。いちばん大切なことは自分が何をやりたいのか，ちゃんと考えて生きるいるかどうかなのです。

保護者の皆様へ

新型コロナウイルス感染症第八波の到来によって，感染拡大が懸念されており，今後も気の抜けない状況が続いております。インフルエンザとの同時流行や新たな変異株の発生なども相まって，コロナ禍の心配事が絶えませんが，年末年始も何卒，基本的な感染症対策に引き続き御理解と御協力のほどお願いいたします。